

☆ 榎並充造、女子薬専も援助

神戸のゴム業界を語る時、やはり**榎並充造**の先駆的な活動と、地域への貢献の大きさを改めて感じる。

榎並は大正13年12月、**兵庫県護謨製造同業組合の組合長に就任**。前後して数々の団体の世話をしてきた。

前年の12年には私財3千円をブラジル移民奨励のために投じ、県社会課はその一部でポスターを作った。日本最初のブラジル移住ポスターである。

このころから昭和の初めにかけて、ブラジル移民熱が高まっていた。

移民の乗船港だっただけに、神戸経済界の有力者間でブラジルに対する企業熱が台頭した。

大正15年5月、**川西清兵衛、榎並充造**らによって財団法人日伯協会が創設された。

これは幹旋親善機関だが、昭和3年には拓殖実行機関として資本金50万円で日伯拓殖株式会社が創設され。これも、**川西清兵衛、榎並充造**らの出資による。

日伯拓殖の社長となった榎並は、昭和3年11月、日本人移民の最も集中しているサンパウロのプロミッション駅付近に、コーヒー栽培と牧畜を兼営する千250ヘクタールの農園を買収した。

さらに昭和4年バナラ州で約20万ヘクタールの買収をはかったが、ブラジルの国内事情で注視となり、代わりにアルゼンチンで綿作殖民事業を目的とする日亜拓殖株式会社の創立に参加。

それも同国経済界の大変動と綿花の大暴落にあって、8年8月解散の憂き目をみた。

この誤算がひびいて日伯拓殖も資本金を100何円に減資する羽目になった。

こうして日伯関係は順調に進むかに見えたが、昭和9年5月、ブラジル政府は日本移民の入国を制限してきた。榎並は失望すると同時に憤激し、日伯協会の常務理事を辞める、と叫びだした。

だが周囲の強い慰留に気を取り直した榎並は、ブラジルとの関係をさらに密接にしようと説き、対伯移民対策委員会を組織して奔走した。

ブラジルへ経済使節を派遣、その返礼使節団の来日など、両国は親善を取り戻した。

この間、昭和9年、**榎並充造**は**神戸女子薬専（現神戸女子薬大）**の経営にも手を貸す。

長女の田村枝津子（ファミリー監査役）が書いている。

「（父は）いつでもメモできるように鉛筆とノートを持ち、夜もマクラ元の必需品でした。夜中でも電気をつけてものを書くので、母は明るくて眠れない、と不服でした。

父は私に、女はどこでも、どんな環境でも平気で眠れるようにならないといけないといっていました。これは、仕事をする男の足を引っ張るな、ということで、女は後顧の憂いの無いよう家を守らなければならないと言っていました。

神戸の薬専の世話を頼まれた時も、家庭を持ちながら出きるから女に適した仕事だ、とって熱心にお世話していたようです。

神戸女子薬学専門学校は7年4月、現王子公園の旧関西学院跡に開校、8年2月、御影町の報徳商業跡に移転した。この時、財団役員のほとんどを辞めさせた。何しろ基本金も帳簿の上だけで、生徒もほとんど居ない。しかも理事者の間ではゴタゴタ続き、という状態だった。

新たな役員には兵庫県学務部長・石建国次郎を理事長に、大藪幸太郎を校長に据え、他の五人をもって組織されたが、9年4月石建が学務長を転任し理事長を辞任する際、後事を**榎並充造**に託した。

9年5月、**榎並充造**が理事長に就任し、学校債1万円を引き受けた。10年4月、本山村（現東灘区本山北）に建設した新校舎落成とともに同地へ移転、この時、生徒数は126人だった。

以後、昭和22年末に理事長を辞任するまでの間、融資や寄付を続け、後者を建て施設を広げた。

24年の新学制で発足した時の学校財産は1億1千万円。榎並はその後も、3千㎡近い土地を寄付している。